

山口の雨乞銅鑼について

(雨乞いについて)

「雨乞い」は、日照りが続いた時に太鼓を打ち鳴らして踊りを踊って、田んぼの稲などが枯れないように、神仏へ雨が降るように祈った儀式でした。

甲佐町では、江戸時代の古文書から、少なくとも正保2年（1645）には「雨乞い」をしたことが分かっています。

江戸時代には、「雨乞い」は村の人たちが総出で行った大切な儀式であり、日照りのたびに村々では雨乞いが行われました。時には惣庄屋（たくさんの村をまとめたリーダー）の命令で、1,000人以上の人々が一斉に雨乞いをしたことも分かっています。また、村の若者たちにとっては、レクリエーションとしても親しまれていました。

下豊内村の記録によると、明治14年（1881）に雨乞いが行われ、本坂谷のボシドラ、仁田子村や船津村の銅鑼など、村ごとの出し物が行列を組んで行われ、雨乞いに奉納されたことが分かっています。

船津村の記録によると、大正10年（1921）8月25日午後1時に雨乞いのために氏神（船津阿蘇神社）を参拝したことが分かっています。

(山口の雨乞銅鑼の歴史)

山口の雨乞銅鑼が船津村の雨乞い銅鑼と同じ物であるかは分かりませんが、山口の雨乞銅鑼も古くから山口地区で使用されていたものと考えられます。

山口の雨乞い銅鑼は、いつの頃からか銅鑼の皮が破れて以来、その胴の部分だけが保管されていました。地域のつながりを強化し活性化するために、昭和63年（1988年）から平成元年（1989年）にかけて実施されたふるさと創生事業を活用し、保管していた銅鑼の胴に新しい皮を張りました。この際、「山口雨乞銅鑼保存会」が結成され、新しい皮には牛一頭分の皮が使われたとされています。

「山口雨乞銅鑼保存会」では、毎年8月5日の山上神社の祭日やあゆまつりなどのイベントで銅鑼を叩いており、雨が長く降らない時期には特にその音色が響き渡ります。また、これまでに2度ほど福岡のお祭りにも招かれ、演奏を行ったことがあります。しかし、約20年前には後継者不足により活動が途絶え、その後は倉庫内で保管されていました。

令和8年1月26日には、この山口雨乞い銅鑼が甲佐町に寄贈され、2月10日に乙女小学校体育館へ運搬されました。

(演奏について)

演奏には、「銅鑼をたたく係」、「横笛を吹く係」、「台車を引く係」の3つの役割がありました。

「銅鑼をたたく係」は男性のみで構成され、台車には8人が乗り込みました。そのうち1人は「親」として先導役となり、残る7人は「子」として共にバチで太鼓を叩きながら歌を歌いました。

「横笛を吹く係」は太鼓の近くで、そのリズムに合わせて笛を吹きました。

「台車を引く係」はあゆまつりなどで台車の移動が必要な際に紅白の紐で銅鑼につなぎ、多くの人々と協力して台車を引きながら歌っていました。この役割は主に高齢者や子どもによって担われました。

歌や横笛は美里町（旧中央町）の先生から教わりましたが、現在（令和8年）では完全に歌える人や笛を吹ける人はいなくなっています。

